

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおブランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人の世に熱あれ 人間に光あれ② ～部落差別をなくしていく闘いとしての公開授業に～

全道研大会特別公開授業後に伝えられた友人の言葉

特別公開授業を終えてから日も浅く、感動に浸る日々を過ごしていた時であった。部落出身の教師である友人から電話があった。

「この前の授業、よかった。ほんまにうれしかった。でも、子どもたちが部落問題について思うことをどんどん語っていく中で、授業を見ていた先生から、『何でこんな授業ができるんだろうか』という話と、『この先生は違うけん』という話が聞こえてきたんじゃ。違うというのはとっさに部落を指しとるなあと、口惜しい思いになったんよ。ほんまに情けない話よ。痛みをもつるもんだけが頑張ったらいいんじゃないかという意識があると思う。」

抱え込むのではなく、本心を伝えることにより救われる

自分の中に溢れていた達成感や充実感が消えていき、これが部落差別の現実なのかという思いが変わっていった。どんなに頑張ってもこのようにしか思われぬのかという思い。その口惜しさを全体学習に取り組んでいる学年の先生方にそのまま伝えた。そして、その思いを伝えることで、私は救われた。

「ひとごと」ではなく「わがこと」として取り組む同和教育の重要性

中間の教師に切なさや悲しみを伝えたことで、私の中に新たなエネルギーが湧き起こってきた。それは、2週間後の徳島県中学校同和教育研究大会公開授業で、すべての教師が「ひとごと」ではなく「わがこと」として取り組む同和教育の重要性を訴えるということであった。

つまり、板野中学校の生徒たちが頑張ったことも、部落の子どもたちだから、あんな思いを持っている。部落のある町で生まれた板野中学校の生徒にしか、あのような授業はできないんだという受け止めに対する疑念であり、悲しみだった。

同和教育は部落の人間が頑張ったらなくなる、同和教育は同和地区を持った学校が頑張ってやっけていく教育、そんな意識が心無い言葉を生んでいる、「それは違う」とそのことをしっかりと訴えていかなければと思った。そして、今こそ、教師として、人として、自分の在り方が問われていると思った。

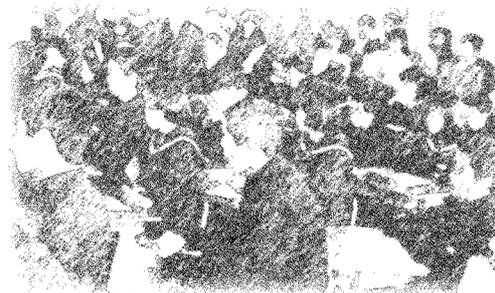
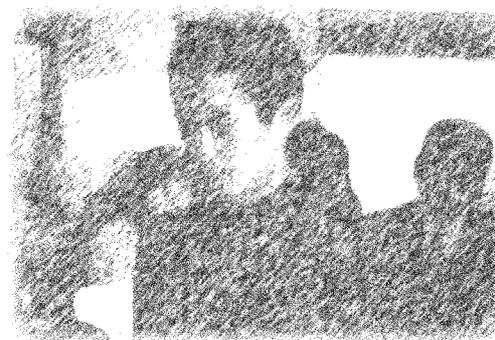
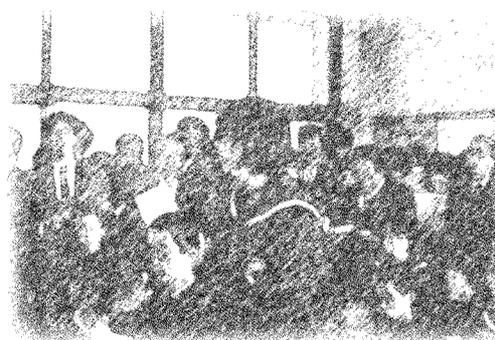
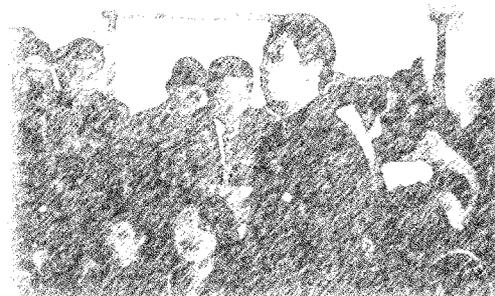
部落問題学習とは部落差別をなくしていく闘い

部落差別を部落という可哀相なところに生まれた人たちの問題としか理解できない、あるいは、自分自身に染み付いている差別意識、目を逸らしている自分自身の差別意識に気づき、それを変えていくことが大切であると受け止められない現実がある。そんな悲しい現実を前に、本当に差別をなくしていく教育を徹底的にやっていきたいという思いが、当時の私を支えていた。

また、私には、共に同和教育に取り組んでくれるすばらしい先生方があり、励ましがあつた。私を信じ、部落解放に向けて、共に歩き続ける生徒たちの存在があつた。

私は生徒たちに私の思いを語っていった。そして、部落問題学習の本質を多くの先生方に、授業を通して届けようという思いが、生徒たちに沸き起こっていった。

私にとつても生徒たちにとつても、こうして部落問題学習が、まさに部落差別をなくしていく実践になっていった。



写真は1991年11月19日
徳島県中学校同和教育研究大会
(板野中学校3年B組公開授業)